

四 湯島に遊ぶ

草庵は青谿書院にあって、塾生たちの縁で但馬各地を訪問することもしばしばあった。文久元（一八六二）年二月、四十九歳の時には、塾生三人をつれて湯島（城崎温泉）に行った。十日間ほど滞在して、その中で漢詩七首を作っている。

辭家

家を辞す

以下七首温泉遊草辛酉

以下の七首は温泉遊草して辛酉

二月暖風天氣新

二月暖風天氣新たなり

童冠結伴兩三人

童冠伴を結び兩三人

辭家且下谿間路

家を辞してしばらく下る谿間路

欲趁江山幾處春

趁を欲す江山幾處春

童冠（参照）弱冠

且（カ）ツ しばらく

趁（チ）ン オウ 追う

江山（川と山）

【訳】

家を出発する

以下の七首は文久元年に温泉に行ったときのもの

二月あたいたかい風が吹き天気もよい

若者を二、三人ともない

家を出てしばらく谷間の道を下っていき

川や山のあちこちの春を追っていく

浴於湯嶼温泉

湯島温泉に浴す

點也浴沂非為病

點也 沂を浴するは病の為にあらざるなり

雩壇一咏又風流

雩壇一咏又風流

吾儂身世渾如夢

吾儂身世渾すは夢の如し

到處姑成適意遊

到處しばらく適意遊をなす

嶼（シ）マ 島 湯島温泉（城崎温泉） 沂（ギ） ぶち かけ 雩（ウ） あまごい

儂（ノウ） 自分のこと 身世（シン）セ わが身と世の中 人の一生

渾（ゴン） にぐる すべて 適意（テキイ） 意にかなう 気に入る

【訳】

湯島温泉に入る

論語にもあるように、點が沂水（川の名）で湯浴みをしたのは病の為ではない
その時雨乞いをする舞台で歌っているが風流なことではないか
我が身がこの世で過（こ）しているのは夢のようなものだ

ここでしたらく気持ちよくゆったりとしよう

※論語にある言葉、「浴乎沂、風乎舞雩」 沂に浴し、舞雩に風す(論語・先進編)
(點が言った)、沂水で湯浴みをし雨乞いに舞う台のあたりで涼みをして、歌いながら帰る

春日雨行

春日雨行

好遊不廢雨中行
輕霧淡煙春草塘
村酒何嫌多苦味
暫蹲傍店滌詩腸

好遊ヤマ不廢雨中を行く
輕霧淡煙春草の塘ツツミ

村酒何んぞ嫌わん苦味多きを
暫く傍ボウテン店イコに蹲シチい詩腸チヨウを滌アラう

廢ヤメル 塘ツツミ 蹲ソソ 滌アラ
腸チヨウ はらわた 心腸はこころ 滌アラ

【訳】

春 雨の中を行く

降り止まない雨の中を行くのもいいものだ
霧が薄く立ちこめ煙が立ちのぼり土手には春の草
村の酒は苦みが多いが好きだ
暫くはそこらの店に入り詩心を洗おう

登水明楼即事

水明楼に登って即事

浴後倘佯结伴遊
偶然到着水頭樓
前人題咏何曾問
直倚蘭干放醉眸

浴後しやうやう倘佯し伴を結んで遊ぶ
偶然到着す水頭樓
前人題咏何ぞかつて問う
直に蘭干に倚りて醉眸すいぼう放つ

即事ソクジ 目の前のことからや景色をうたった詩
てもなくぶ らつく 水頭スイトウ 川のほとり
醉眸スイボウ スイボウ よったときの眼
倘佯しやうやう ショウヨウ あ
曾ソウ すなわち かつて

【訳】

水明楼に登って作る

温泉に入ってからあてもなく歩き仲間と楽しむ
たまたま川のほとりの楼に来た
ここで先人が何か詠っているかと問うた

すぐに欄干にもたれかかり酔った眼で辺りを眺める

從湯嶼至瀬戸舟中

湯島より瀬戸に至る舟中

層巒疊嶂似屏障

層巒疊嶂屏障に似たり

一道長江水面光

一道の長江水面の光り

絹卷祠邊回首望

絹卷祠辺首を回して望む

宛然船在畫中行

宛然として船は画中に在りて行く

從より 層巒ソウラン めぐり重なった山

疊嶂ソジョウシヨウ 重なり連なる山 屏障ヘイシヨウ 屏風、ついたて

宛然エンゼン ちようど まるで

【訳】

城崎より瀬戸に行く舟中にて

岩が幾重にも重なり合い屏風のように見える

一本の長い川の水面が光る

絹卷神社の辺りを首を回して見る

まるで舟は絵の中を行っているようだ

瀬戸観海

瀬戸観海

海巖決皆望無窮

海巖より 皆を決して望めば 窮なし

白浪青波捲袖風

白浪青波袖を捲く風

漁老不知何況味

漁老は知らず何ぞ況味あるかを

孤篷遙掛半空中

孤篷遙かに掛ける半空の中

皆マナジリ 況キヨウ ありさま ますます

孤篷コホウ 一そうだけポツンと浮いている船

【訳】

瀬戸で海を観る

海辺の岩を目をこらして見るとすごいものだ

白い浪青い波そして屏風のような岩に吹き付ける風

年若い漁師は何が味あることか知らない

波にもまれている一艘の舟が中空に舞っている

※瀬戸には日和山と呼ばれる奇岩の入り組んだ海岸がある。現在もマリンワールド

などの水族館があるなど、昔からの海岸の観光地。

帰山

尋勝吟鞋何厭遐
浹旬始返舊山家
自憐簾外春方好
一樹滿庭開落花

山に帰る

勝を尋ね吟鞋何ぞ遐を厭う
浹旬始めて返る旧の山の家
自から憐む簾外の春方に好し
一樹滿庭開落花

鞋||アイ くつ 遐||カ 遠い 浹旬||シユウジュン 十日間
舊||キユウ 旧 もと 自憐||ジリン 自ら憐れむ 憐れみいとおしむ
方||マサニ 開落||開くことと散ること

【訳】

山に帰る

よい景色を尋ね歩き漢詩もでき遠いとも思わなかった
十日間ほどして山の自分の家に帰る
家の外に見える春もまたよいものだと自ら満足している
一本の樹の花が庭いっぱい咲いたり落ちたりしている